

万葉集にあらわれた服飾

山 田 清 野

序

我国古代文学の代表的な作品である万葉集の作られた時代は、仁徳天皇の時代（313～399）から奈良時代の中期大平宝字3年（759）に至る長い期間で、神功皇后御征韓まではいわば他の国々とは隔絶された世界にあって、原始的な日本固有の上代の風俗を形成していたが、その後韓文化の影響を受けて新しい文化の光にめざめ、思想的にも、実生活の面でもしだいに変化をみせはじめ、やがて大陸との文化交流が直接行なわれるようになり、はなやかな時代になっていくのである。しかしながら一方ではやはり深く根をはった古くからの思想や風習は少なからず残っていたようである。我々が現在の衣生活を考えるとき、やはり遠く古代の人々の生活がどのようなものであったかを知ることは必要なことであるし、また興味の深い問題でもある。この際にこの上もない研究の資料を与えてくれるのがこの万葉集ではないだろうか。

本 文

この万葉には約4500首の歌が収められており、作者の数も260人ほどにのぼるといわれているが、作者不明の歌も多く全体の約半数を占めているのもこの歌集の特徴である。そして代々の天皇をはじめとし位ある宮廷人のととのった名作はもとより、野趣に富み情熱的な地方の名もない庶民の歌、また東国より九州におもむいた防人^{さきもり}の歌など、その幅の広いこともおよそ他に比すべきものがないと思われるのである。したがってこの時代の広い階層の人々の生活をこの歌集を通してよみとり、想像することができると思うのである。この歌集の中で当時の衣生活のあらわれている歌は約二百数十首に及ぶが、これらから万葉時代の服飾が如何なるものであったかについて研究の糸口を引き出してみたいと思う。まず衣服材料にはどのようなものが使われていたのであろうか。衣服材料のあらわれた歌を拾い出してみる。

- ・庭に立つ麻手刈り干し 布曝す東女を忘れたまふな（巻4．521）
- ・須磨の海人の監焼衣の藤衣 ま遠しあればいまだ著なれず（巻3．413）
- ・富人の子どもの 著る身無み くたし棄つらむ 絁絹らはも（巻5．900）
- ・麻衣著ればなつかし 紀の国の妹背の山に麻まく吾妹（巻7．1195）
- ・西の市にただひとり出でて 眼並べず買ひにし絹の商じこりかも（巻7．1264）
- ・今年行く新島守が麻衣 肩の紕ひは誰かとりみむ（巻7．1265）

- ・劔大刀鞘ゆ納野に葛引く吾妹 ま袖もち著せてむとかも 夏草刈るも (巻7. 1272)
- ・かにかくに人はいふとも 織り次がむ わが織物の白麻衣 (巻7. 1298)
- ・たらちねの母が養ふ蚕の繭隠り いぶせくもあるか 妹に逢はずて (巻12. 2991)
- ・筑波嶺の新桑繭の衣はあれど 君か御衣し あやに著欲しも (巻14. 3350)
- ・多麻河に曝すてづくり さらに何ぞこの児のここだ愛しき (巻14. 3373)
- ・とこしへに夏冬行けや ^{かはごろも} 褰 扇放たぬ 山に住む人 (巻9. 1682)
- ・伊夜彦神の麓に 今日らもか鹿の伏すらむ 皮服著て 角付きながら (巻16. 3884)
- ・古にありけむ人の倭文幡の帯解き交へて………… (巻3. 431)

これらの歌にみるように、おもに衣服材料としては麻・コウゾ・藤・葛等の植物の皮や絹、そして野獣の毛皮などが用いられた。これらの中でも麻が大部分を占めていたようである。夏の間に刈り取ったものを冬になって外皮を去り、細くさいて糸にし、これを機にかけて布にした。そして着古したものは、これを解いて洗い打ってやわらかにしてまた使った。麻は非常に丈夫なので破れるというより織糸が片よってすりきれることが多かった。これを^{まよ}紕うという。このようなことから、衣服材料が当時はなかなか得がたいものであったことがうかがわれる。またコウゾは色が白いので知られているが、白たえ衣というのは普通麻を^{さら}曝して白くしたものであったようである。白^{たえ}栲・荒栲の文字は頻繁に出て来る。文字の上ではそう厳密に使いわけていないようであるが、大体において荒栲は、栲布類のごつごつした樹皮繊維で手ざわりの硬いものをいい、麻・コウゾの細い草皮繊維である真の意味の麻布を白栲といったのであろうと考えられる。倭文^{しづ}というのは、コウゾ・麻などのたて糸を青・赤などに染めて交織した縞物で、我国最初の紋織である。これは、はじめは良い織物とされていたが、大陸風の新しい織物が興るようになってから古風なものとされるようになった。藤はことに繊維があらく粗末なものとされていたので、^{あま}海人などの貧しい人々の着るものとされていたのであろう。養蚕は早くから大陸の方法が入ってきて絹を得ることができた。しかし一般の人にはとうてい縁の遠いものであった。また木綿もまだ広くゆきわたらず当時は舶来のもので珍重され、絹とともに富人の所有物であった。歌の中にしばしば出て来る木綿だすき等は麻・コウゾなどの繊維をさしているようである。これらの衣服材料は、ようやく分業の時代に入ってきたとはいいながら、ほとんど婦人が原料から糸にし織物にしてそのまま、時には染色をほどこして裁縫し、また修理したものであった。

- ・公がため手力疲れ繕れる衣ぞ 春さらばいかにいかにかに摺りては好けむ (巻7. 1281)
- ・夏影の房の下に衣裁つ吾妹 うま設けてわがため裁たば やや大に裁て (巻7. 1278)

ここでこの時代の衣服の色について少し調べてみたい。やはり染色技術の発達していないこの時代にあっては、「白」が圧倒的に多く、白い衣服のあらわれている歌は60首にもおよぶ。

- ・春すぎて夏来たるらし 白栲の衣ほしたり天の香具山 (巻1. 28)

- ・…………つかはしし御門の人も白細の麻衣………… (巻2. 199)
- ・白細に舍人装ひて (巻3. 475)
- ・わが夫子が白たへ衣 往き触れば染ひぬべくももみつ山かも (巻10. 2192)
- ・白細布の袖はつはつに見しからにかかる恋をもわれはするかも (巻11. 2411)
- ・白細布の袖折り返し恋ふればか 妹が容儀の夢にし見ゆる (巻12. 2937)

白い色から夏の季節感を呼ぶのは昔も今もかわらぬ感情である。また日本人の純潔、清浄を何より尊ぶ気風から白い色は神につかえる人々の衣服に使われ、また位ある人の死去に際しては、皆白い衣服に装ってその死を悲しんだ様子がかがわれる。白について多くよまれているのはやはり「赤」であり、これは約20首ある。赤い色は衣服令によれば、蘇芳・緋・紅・桃染・はねず等であるが、ほとんど「くれない」ということばであらわれている。

- ・松浦河川の瀬早み 紅の裳のすそ沾れて 年魚か釣るらむ (巻5. 861)
- ・黒牛の海紅にほふ ももしきの大宮人し あさりすらしも (巻7. 1218)
- ・立ちて念ひ居てもぞ念ふ 紅の赤裳裾引き去にし姿を (巻11. 2550)
- ・紅の八監の衣 朝な旦な穢れはすれどもいやめづらしも (巻11. 2623)
- ・紅の濃染の衣 色深く染みにしかばか忘れかねつる (巻11. 2624)
- ・やまぶきのにはへる妹がはねず色の赤裳のすがた 夢に見えつつ (巻11. 2786)
- ・赤帛の純裏の衣 ながく欲りわが念ふ君が見えぬ頃かも (巻12. 2972)
- ・桃花褐の浅らの衣浅らかに思ひて妹に逢はむものかも (巻12. 2970)
- ・紅の薄染衣浅らかに相見し人に恋ふる頃かも (巻12. 2966)
- ・紅に衣染めまく欲しけども 著てにははばや 人の知るべき (巻7. 1297)

衣服令によれば男子は^{らいふく}礼服・朝服ともに四位は^{こきあけ}深緋の衣、五位は^{うすあけ}浅緋の衣とされ、女子については^{ないしのみようぶ}内命婦の四位五位の上衣が緋であり、宮人は紅の裾を用いてよく、庶民の女の着物は無位の宮人に同じで、これも紅の裾を用いてよかった。上記の歌にもよまれているようにこの赤い色は、紅花・あかね・はねず等の植物から染料を取って染めた。赤い色が他の色よりも数多くよまれているのはやはりその色の持つはなやかな感じが当時の人々の心をとらえたもので、殊に若い女性の赤裳の姿は人々にこの上もなく美しい印象を与えていたようである。したがって女性の美しさの表現や、女性に対する恋心を紅の色でたとえた歌が多いのは興味深い。高貴の色といわれる「むらさき」についてはあまり多くは歌われていないが、次のようなものがある。

- ・紫草のにはへる妹を憎くあらば 人妻ゆえにわれ恋ひめやも (巻1. 21)
- ・託馬野に生ふる紫草衣に染め いまだ著ずして色に出にけり (巻3. 395)
- ・唐人の衣染むといふ紫の ところに染みて念ほゆるかも (巻4. 569)
- ・紫の帯の結びも解きも見ず もとなや妹に恋ひ渡りなむ (巻12. 2974)

- ・紫の綵色の^{かざら}襪はなやかに今日見る人に後恋ひむかも（巻12. 2993）
- ・紫は灰指すものぞ 海石榴^{つば}市の八十^{ちまた}の衢に逢へる兄や誰（巻12. 3101）
- ・……………懐しき紫の大綾の衣……………（巻16. 3791）

多くの色の中で最も高貴な色として、またゆかりの色として、あるいは禁色としてむらさきは飛鳥時代以前よりすでに尊いものの象徴として高い位置におかれていた。聖徳太子によって制定された冠位の制でも最高の位である徳は紫色とされていたことでもわかる。

大化改新によれば、織物・染色物はすべて錦織部・服部部・太秦公宿禰等の帰化人系統によって統べられ、これらの工人は何れも宮廷の織部司に統轄され官営として百官有司の衣服を作っていた。その時代むらさきが最高の色であって、深紫色を禁色としてやたらに民俗に供せられるのを禁じたのも天皇の儀礼的な御衣がそれであったためである。この色は紫草の根から染料を取る。紫草は野生もあるが、多くは諸国に命じて栽培させ、その紫草園は国司が巡視して雑人の乱入を禁じたものである。このことはその染料が如何に尊重されたかを知るのに充分である。また、唐人の衣染むという紫の……………の歌はこのむらさきの染法が大陸から伝わったことを示しており、紫は灰さすものぞ……………の歌には、灰を染色の際に用いることがあらわれている。すでにこの時代に促染または媒染のために灰のあくを用いていたということは驚くべきである。これらの他に衣服令により、みどり・はなだ等の色が衣服に用いられていたことがわかるが、万葉集には前述の色以外の色はわずかに次の歌にあらわれているにすぎない。

- ・……………山藍もち摺れる衣著て……………（巻9. 1742）
- ・……………葛飾の真間の手兄奈が 麻衣に青袴つけ……………（巻9. 1807）
- ・馬の歩みおさへ駐めよ 住吉の岸の黄土ににはひて行かむ（巻6. 1002）
- ・……………水縹^{みはなだ}の絹の帯を……………（巻16. 3791）

これらの他に、はぎ・つきぐさ・からあい・つるばみ・かきつばた・こなぎ等の植物がその花・根・茎・果実等から染料をとって衣服の染色に用いられた。

- ・わが屋戸に韓藍蒔き生し枯れぬれど こりずてまたも蒔かむとぞ念ふ（巻3. 384）
- ・月草に衣ぞ染むる 君がため綵色ごろも摺らむと念ひて（巻7. 1255）
- ・橡^{つるばみ}の解溜衣の あやしくも殊に著欲しきこのゆふべかも（巻7. 1314）
- ・わが屋前^{には}に生ふる土針 心ゆも想はぬ人の衣に摺らゆな（巻7. 1338）
- ・わが衣摺れるにはあらず 高松の野辺行きしかば はぎの摺れるぞ（巻10. 2101）
- ・苗代のこなぎが花を衣に摺り 馴るるまにまにあぜかかなしけ（巻14. 3576）
- ・かきつばた衣に摺りつけ丈夫のきそひがりする月は来にけり（巻17. 3921）

このように種々の植物を使いそのしぼり汁に浸したり、直接花を布に摺りつけたりして染色したことがわかるが、だいたい植物質の染料は色が薄いので何度も繰返し染色することによ

て濃い色を求めたようである。また多くはまだらに染ったり、すぐに褪色しやすい欠点を持っていた。くれない・つきぐさ・はねずなどは特にあせやすいものであったらしく、次のような歌がよまれている。

- ・つき草の変ひやすく念へかも わが念ふ人の言も告げ来ぬ（巻4. 583）
- ・念はじと言ひてしものを ^{はねず}翼酢色の変ひやすきわが心かも（巻5. 657）
- ・鴨頭草に衣色どり摺らめども ^{つきぐさ}変ふ色といふが苦しさ（巻7. 1339）
- ・紅はうつろふものぞ つるばみのなれにし衣になほ若かめやも（巻18. 4109）

このようにすぐに色があせることから、うつろいやすい異性の気持や、はかない恋心などにたとえた歌が多いのは面白いと思う。またつるばみ（どんぐりの実を煎じて黒色の染料とする）で染めた衣は一般庶民、賤民の着物とされていた。衣服令にも「家人奴婢橡墨衣」と出ている。つるばみは他の染料に比して多くを得やすかったのであろうか。

- ・橡の衣は人皆こと無しといひし時より 著欲しく念ほゆ（巻7. 1311）

この歌などはつるばみの衣にかけて身分あるゆえの悩みを歌っている。またつるばみで染めた衣は他の染料で染めたものと違って洗ったり、年を経るにつれてかえって色が落付いて、黒みを増すともいわれている。それからこれらの他に見逃してならないのは、当時の染色の技術に夾纈^{ゆひはた}があったということである。

- ・……………^{ゆひはた}夾纈の袖つけ衣……………（巻16. 3791）

この夾纈^{ゆひはた}といふのはすなわち板締しぼりのことで、二色以上の色彩を用い、きわめて情緒ゆたかな意匠であったことがしのばれるのである。次に衣服の形態について少し調べてみたい。古代の衣服は上部と下部に分かれた二部式で、上衣は皆筒袖で丈は腰に達し合わせ、目は左右についた紐で結びあわせるものであった。下部は男子のは褌（はきも）といい、二股になっている。女子のは裳^もといって幅が広く丈の長いもので、これを腰にまきつけ、その両端の紐を左脇で結んだ。

- ・吾妹子が形見の衣下に著て直に逢ふまではわれ脱がめやも（巻4. 747）
- ・徹^{とお}るべく雨はな零りそ 吾妹子が形見の衣服 われ下に著り（巻7. 1091）

これらの歌には男女が互いに衣服を交換して着た様子が歌われている。これはまだ衣服の形態が未分化であった初期においては、下着では男女の差があまりなかったことを示している。その後大陸との文化交流が盛んになり、推古天皇11年には位階官服の制が定められ、その後も数々の衣服に関する制令が出されて衣服の形式は拡大し美化されていった。

- ・唐衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ来のや 母なしにして（巻20. 4401）
- ・韓衣欄^{すそ}のうち交へあはねども 異しき心をあが思はなくに（巻14. 3482）

等に見えるように、大陸風の衣をからごろもと称して官吏や兵士の服装に使われていたようである。これは褌^{つま}が開いていて裾の合わないのが特色であった。また男女とも使用していた帯は長さは一重にまわるのが普通で、幅はせまいものであるが、これもだんだん地質には韓土伝来の錦^{にしき}、綾^{あや}などの美しいものが作られるようになり、装飾の意をあらわしたことがわかる。

- ・高麗錦紐解きかはし天人の妻問ふ夕ぞ吾も偲はむ（巻10. 2090）
- ・紫の帯の結びも解きも見ず もとなや妹に恋ひ渡りなむ（巻12. 2974）
- ・高麗錦紐の結びも解き放けず 斉ひて待てどしるし無きかも（巻12. 2975）

またこれらの歌からは帯、紐等がこれを結ぶところから、男女の恋情を固めることにたとえられていることもわかる。しかし大陸文化の影響を受けて大きく発展していった服飾も、宮廷を中心とする上流階級でのことであって、一般の庶民その生活のまずしさからか、また政治的に押さえられていたためか、すべてが保守的でほとんど初期の服装をそのまま持ち続け、貧弱なものであったと思われる。かの有名な貧窮問答歌の中には、

- ・…………麻衾引き被り布肩衣ありのことごと…………（巻5. 892）

とあり、布肩衣というのがある。これは袖がなく肩ばかりをおおう衣服で、貧民のものであった。この頃すでに一重ばかりでなく袷の着物を着ていたことが次の歌にあらわれている。

- ・橡の袷の衣 裏にせばわれ強ひめやも君が来まさぬ（巻12. 2965）

また旅には多く重衣をして寒さをしのいだものであろう。

- ・旅衣八重著重ねて寝のれども なほ膚寒し 妹にしあらねば（巻20. 4351）

また足結^{あゆい}といって川わたりをするときなどは袴の裾をひざ頭の下で紐で結んでいた。

- ・斎種^{ゆだね}時く新墾^{あらき}の小田を求めむと 足結出で汚れぬこの川の瀬に（巻7. 1110）

女子の服装には領巾^{ひれ}・おすひがある。領巾は白い布で作し、肩にかけ左右に長くたらししていた。これを振ることによって呪力^{じゆ}を生ずるとされていたようだが、万葉の時代にはすでに装飾のため、盛装の時にこれを掛け、人の送り迎えにこれを振ったものである。

- ・見渡せば近き里みを たもとほり今ぞわが来る 礼巾^{ひれ}振りし野に（巻7. 1243）
- ・…………白細の天領巾隠り…………（巻2. 210）

おすひというのは、特殊の衣服であり、礼装用に普通の衣服の上に着たもののようで、打掛のような形であったのであろう。

- ・…………たわやめの襲衣^{おすひ}取りかけ…………（巻3. 379）

次に装身具としては櫛^{くし}・玉の緒・たまき・くしろ・かざし・かづら等がある。櫛はもと男子

が成年になって髪を「みずら」に巻く時にこれを留めるためにさしたもので、魔よけの意味を持っていたが、万葉には女子が装飾用にさしたり、髪をくしけずるためのものとして歌われている。材料はほとんどつげであったようだ。

- ・君なくは何ぞ身装^{みよそ}飾^{くしげ}はむ 匣^{つげ}なる黄楊^{をぐし}の小梳も取らむとも念は（巻9. 1777）

玉の緒はいろいろな玉を緒に貫いたもので、首にかけたり、手にまいたりした。そして玉はその人の靈魂の象徴と考えられ、玉の緒は長いので生命を意味した。この玉には貝や美しい石などが用いられたが、時にはたちばな・やぶこうじなどの植物の実もこれに代用されたようである。たまきはやはり玉や布を手首にまいたものである。

- ・玉の緒のくくり寄せつつ 末終に去きは分れず 同じ緒にあらむ（巻11. 2790）
- ・倭文手^{しつたまき}纏^{いのち}数にもあらぬ寿もちいかに幾許わが恋ひわたる（巻4. 672）
- ・……海神の手纏の珠を……（巻15. 3627）

くしろもやはり貝や金属などで輪を作って手にはめて飾りとしたものである。

- ・玉くしろまき宿る妹もあればこそ 夜の長けくも歎しかるべき（巻12. 2865）

かざし、かづらはもとは花のない植物を使うものであったとのことであるが、この時代には季節の花をも輪につらねて、頭上に飾った。五月の節句に少女が葉根かづらをするなどの歌にそのおもかげがしのばれる。

- ・葉根^{はね}今^{けふ}する妹を夢に見て 情のうちに恋ひわたるかも（巻4. 705）
- ・梅の花今盛りなり 思ふどち頭挿にしてな 今盛りなり（巻5. 820）
- ・あやめ草 花たちばなを玉に貫き 纏にせむと……（巻3. 423）

以上万葉集にあらわれた服飾について、いろいろな面から考察してきた。服飾の目的が大きくわけて体温調節や外傷の防備などの実用的な面と、さらに羞恥の念から体を被ったり、魔よけ・装飾等のための精神的な面とに分けられるのはいうまでもないが、これらの目的、殊に精神的な面は衣服の発達にともなってだんだん広がっていくものである。

万葉の時代には、すでに装飾的な美しさを目的とするまでに至っている。そしてその装飾も、君なくは何ぞ身装飾はむ……（前出）の歌にもあらわれているように、異性の関心を深めるための素直な表現としてのものであったようである。また上流階級の人々の間では、だんだん大陸文化の模倣が著しくなっていたのであるが、下級の庶民たちはやはり上代のままの衣服で、そのへだたりが大きくなるが、やがてその後国風文化の隆盛をみるに至り、日本独自のものが生れてくるのである。しかし万葉集いたるところにあらわれている、自然ときりはなすことの出来ない大自然の中の衣生活は、いかにも情緒豊かでなつかしいものを感じさせるものであった。

あ と が き

ここに取り上げたテーマは、極めて大きく範囲が広く、簡単にはまとめられる問題ではないが、また興味をつきない問題でもある。今回は、まず万葉集全巻の中から服飾に関する歌を採集し、それらについて衣服材料・染色・衣服形態・装身具に分けて考察を試みた。しかしこれはあくまでも歌からの推察であり、材料・染色・形態などその時代の経済・政治・外交などの背景のもとにどのように生産され、どのように着用されたかの実証的な裏付けが必要である。この問題は多岐にわたり今後時間をかけて研究されなければならない。ここにあらわしたものはこのテーマを研究していくためのほんの端緒にすぎない。

参 考 文 献

- 武田祐吉：増訂万葉集全註釈（1～12）
江馬 務：増補日本服飾史要（1949）
明石染人：染色文様史の研究（1931）
和田辰雄：日本服装史（1943）
日野西資孝・後藤守一：被服史（1951）
渡辺百世：家政学雑誌 9，205（1953）